



「心」のある授業を求めて

人間科学部 岡田 斉



専門は知覚・認知心理学。近年は夢の認知的側面に関する調査が研究の中心となっている。保育士・幼稚園教員養成を行う短大に11年間勤務の後1999年に人間科学部臨床心理学科に赴任。学部での担当科目は、認知心理学、イメージ心理学、心理学実験、人間科学演習、卒業研究などで、臨床心理学以外の基礎心理学が担当領域。学生たちの素朴な疑問を心理学の体系的な枠組みでとらえられるように共に考えることの面白さにはまっている。

前任校に勤務していた20年ほど前に社会人を対象とした授業を頼まれたことがあった。講義を終えたところで塾年の受講生から声をかけられた。その方は、失礼を承知で言わせていただくが、先生の講義はとても面白いのだが、聞いていて腹が立った、それは「心」がないからだとおっしゃった。「心」のある授業とは？私の試行錯誤の一端を記そうと思う。

1. 講義改善の試み

—リアクションペーパーの積極的活用—

担当科目のうち受講生数が200人程度の授業である「認知心理学」と「イメージ心理学」では一方的に話す一般的な講義のスタイルで実施していたが、10年ほど前に見直しを思い立った。まず、受講生の声に耳を傾けてみようと考え、A5版のリアクションペーパーを授業の最後に実施することにした。学生たちの感想を見ると自分では気づかなかった問題点を数多く指摘され、顔から火を噴く思いをした。さらに、授業内容以前に、授業中の他の学生の私語への不満、冷房時のエアコンの温度調整など、授業の環境整備が極めて重要であることが良くわかった。意見や授業内容への疑問への対応は、発言に配慮する、必要性が高い場合には次回に口頭で説明する程度にしていたが、回数を重ねるにつれて疑問の内容が重複するケースが多くあること、視点

がユニークでその疑問に答えることで対象の本質的な理解がより深まる可能性があるものが目につくようになり、単に口頭で返すだけでは惜しいと思うようになった。ちょうどその少し前、利用者向けのアンケート用紙に学生がふざけて書いた落書きの一つひとつにペーソスの利いたきめ細かい返答をしたことで有名になった「生協の白石さん」の話も刺激になった。私もあのような「おちゃめな」やり取りをしてみたい。そこで、授業改善を目的とすることに加えて、学生たちの等身大の疑問を取り上げ、なるべく面白く返すよう配慮してA4一枚の裏表に私の見解を書いたものを次回の授業で配ることを始めてみた。

この見解を紙で返す試みはいろいろな効果を持っていたことが後にわかった。まず、学生にとって身近で視点がユニークなものや本質に関わる奥深い疑問を選ぶようにしたこと、学生たちに疑問の立て方を考えさせる機

会になること。次に、全員の疑問には応えられないので選択することになるが、これが逆にある程度効果的であったこと。質問が取り上げられた学生は「ラジオでリクエストが採用された」気分になるらしく、さらに次も採用されようとして、授業に積極的、批判的に関与していく姿勢を生み出すこともあるらしいのである。質問内容も変化していく。授業の当初は形式的で浅い質問内容が多いのだが、コメントを返していくうちに、疑問の内容の水準が目に見えて高くなる。学部の1, 2年生であるにも関わらず、授業が2ヶ月も過ぎると疑問の内容が専門領域の最新の議論にまで達するようになることがままあることに驚かされた。これらの疑問に答えるためには私もさらに勉強せざるを得なくなった。調べたことは授業にも反映させる。その結果、学生の関心と理解の水準に合った形で最先端の議論の解説が自然な形で進行することになってしまった。「牛に引かれて善光寺参り」ということわざがあるが、学生の疑問に引かれて学問の最先端へ。学生を教えているつもりでいたが、実は彼らに教えてもらっているのではないかと感じるようになったのであった。

2. 「岡田雑貨店」

ーゼミと卒論と修論ー

人間科学部での3年のゼミと4年の卒業研究では原則的には2年間を通してメンバーは変わらない。受講生数は私の場合、各学年概ね15人程度。修士課程の院生も各学年1, 2人程度いるので総勢30人以上の結構な所帯になる。研究内容は心理学で扱える範疇にあること、文献だけでなく実証的な研究を行うことという制限はあるが、対象は自らが興味を持ったことなら何でも良い。その結果、研究内容はばらばらになる。学生がこれを称して「岡田雑貨店」と表現したことが気に入っている。

ゼミは毎回3人程度パワーポイントを用いてプレゼンテーションする形で進めている。3年生の当初は緊張で声は上ずり、足が震えるものすらいるが、何回かたつうちに、堂々と話せるようになり他の発表にも臆すること

なくコメントができるようになる。学問から出発するのではなく、日常生活にある疑問を対象とするせいか、他のメンバーも理解し興味関心を持ちやすく、ディスカッションは盛り上げる。良いプレゼンテーションがあると、その後の発表水準が上がっていくことを何度も目の当たりにし、学びあいの場の重要性を痛感している。お互いにゼロの状態から研究を積み上げていく様子を2年間かけて共有していく結果、他のメンバーの研究もまるで自分のことのように感じ取れる効果もある。卒業生たちと会うことが時々あるが、卒業して何年も経っているのに、～さんの研究はこうだったと、昨日のことのように語るほどその影響力は持続するよう感じる。

研究内容は、調査や実験が主となる。各学期に1回程度は行う方針にしているので、卒論としてまとめると、実験や調査が3つ程度になり、修士論文に匹敵するレベルに達するものが毎年出ているように思う。実際、ここ7, 8年の間に卒論の研究を元にまとめた論文が査読付きの学会誌にすでに4件掲載されている。これらを執筆した学生たちのうち2人は昨年度博士の学位を取得、残りの2人も博士課程に在学しており近々学位を取得することができそうな様子である。

3. まとめ

片面では収まりきれず裏まで書かれたコメントを見るにつけ、匿名でもないのに歯に絹を着せない厳しいコメントを見るにつけ、お互いの研究の進め方でゼミの学生が議論を戦わせているところを見るにつけ、私はこの職業に就けた幸せをかみ締めている。しかし、「心のある授業」に達しているとは未だに思えない。試行錯誤はまだまだ続きそうである。



「ゼミの夏合宿に全員集合」